

新聞記事から2025年の医療を読む

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 田中 宏



2012年12月に第2次安倍内閣がスタートした。8千円台だった日経平均株価も、今では2万円を超えるようになった。業種によっては景気の実感に程度があり、賛否両論ではあるが一つ結果を出したといえる。しかし、日本の債務は2015年3月現在で1053兆円と増える一方である。そこで最近の新聞の動向を見てみると、一つの方向性が見えてきた。それは、医療福祉に関する財政の削減である。

① 4月、日経新聞「胃がん検診に内視鏡を導入し、これまで40歳以上であった対象者を50歳以上にし、毎年ではなく2～3年に一度とする方針を国立がん研究センターが出した」

② 5月、読売新聞「財務省は2017年までにジェネリック医薬品の普及目標を80%まで増やすことを厚生労働省に求めた」

③ 6月、読売新聞「政府は医療費抑制・在宅推進のため、10年後までにベッド数を10%削減する推計を出す」

④ 6月、日経新聞「政府は2025年に最大20万床のベッド数を削減することを目標とした」

⑤ 7月、産経新聞「九州大別府病院で乳癌の切除標本に癌を光らせる試薬を開発し1mmのがんを光らせることを確認した」

⑥ 7月、産経新聞「血液1滴でがんを診断」

⑦ 7月、日経新聞「医療訴訟が増加する中、医師と患者の橋渡しをする医療メディエーションという役割の必要性」

⑧ 8月、読売新聞「アジアで医療ツーリズムが活発化」

ある程度景気が回復した今、膨れ上がった借金を返済するためには、医療や福祉だけがいつまでも聖域とは言えず、削減の方向に向かっていくことが容易に読み取ることができる。つまり医療から介護または在宅医療へシフトしているのである。2025年の医療は少なくとも今よりも財政規模が10%削減されることが分かっている。簡単に言えば、私たちの雇用が10%削減されるか給与が削減されることになる。さらには、2020年に東京オリンピックがあり、それが終わると今の景気が失速するとも言われている。

しかし、幸いなことに現在はその10年前の2015年であり、今から準備を整えるに可能な時間が残されている。では、何を準備すればよいのか考えてみたい。

検査業界は今よりも明らかに縮小することが予想され、差別化を図った人間ドックは生き残るであろう。検査精度が高いというだけではお客は集まらない。お客はカプセル内視鏡など苦痛を伴わない検査を好む傾向にある。今、カプセル内視鏡の読影認定はコメディカルがその一端を担うことができる。また被ばくの問題も残されてい

るが、CTコロノグラフィーなどの3DCTも将来性がある。

医療訴訟の多くは、患者と医療者側の医療不信が原因と言われている。検査、治療における専門知識、そして患者との対話力を生かして、医療訴訟を未然に防ぐ医療メディエーションというスキルが必要になるという。この役割はどの医療職種が行ってもよい。医療と病院経営においてリスクを事前に回避する重要な役割である。

次に、日本国内だけでなく、世界の富裕層を相手に医療ビジネスが展開していく時代である。富裕層は最高の医療技術を求めている。日本の医療技術は世界でも最先端ではあるが、医療制度に障壁もある。日本の医療法人が、日本以外のアジア諸国で医療ツーリズムを展開することも十分に考えられる、仮に日本の制度が変われば、海外の医療法人が日本で“おもてなし”医療ツーリズムを行うことも十分に考えられる。そこには、当然、高い精度の医療技術が必要であるが、語学力も必要である。もちろん英語だけではなく、複数の言語を話すことが要求されるであろう。

今後は、病院経営が今よりも厳しい時代を迎えることから、管理者には部門内だけではなく、病院全体のコンサルタントができるスキルが要求される時代になる。前回の巻頭言でも書いたが、提案型ビジネスである。

私たちの先輩でも、検診業務や遠隔読影の会社を起し、代表取締役社長として成功している先輩も少なくない。技師も独立という道もある。

若い技師の方々には、ぜひ、今から10年後の未来に備えていただきたい。私を含めた50歳前後より上の技師の方々も人生80年といわれる時代であり、可能であれば備えるのが良いが、現実にはそうもいかない。10年後には定年であり、今から新しい技術や知識を習得するには限界がある。そんな先輩技師の方々には是非とも、後輩育成をお願いしたいと思う。過去を知っている分だけ未来を読むことができるのは50歳前後より上の技師ならではのからだ。

一般的に未来を読むことは難しいと言われる。私もそうであるが事前に分かっていたら、と後悔することを幾度も経験した。しかし、この新聞記事を読むだけでも結構なことが分かってくる。

今、私たち技師に必要なのは、これまでの仕事のスタイルにこだわらないで、新しいスタイルを築くことだと思う。そして自分たちの分野に閉じこもらないで、幅広い知識を身に付けていただきたい。

「こだわりも必要であるが、こだわりすぎは進歩を止める」

「最も強い者が生き残るものではなく、最も賢い者が生きのびるものでもない。唯一生き残ることができるのは変化できるものである」